

「ところ」の意味体系 —メタファー論の見地から— ルチラ・パリハワダナ

「ところ」は多様な表現体系を作り出す。しかし、従来の研究では、「ところ」の個別用法に対する検討が多く、その体系的意味が十分に解明されているとは言い難い。そこで、本研究では、Lakoff and Johnson(1980), *Metaphors We Live By*, (The University of Chicago Press.) のメタファー理論を援用しながら、「ところ」の意味体系の解明を試みた。

「ところ」は実質的な意味を表す場合、物事の一部を切り取り、ハイライト化する。背景化される全体の残りの部分は連続体を成す。

一方、メタファーとして使われる場合、連続体の<部分>という「ところ」の本来の意味が対象の物事に投影され、それを介して対象の物事が把握される。このような「ところ」のメタファーとしての応用が、属性(「彼のいいところ」)、実態などの状況描写(「今のところ」)、時間的位置の表現(「調べているところ」)、順接(部分間の連続)(「捜査したところ、～がわかった」)・逆接(部分間の非連続)(「田舎に帰ったところで、家族にも会えない」といった出来事間の関係の表現、更には、談話における話題転換(部分間の非連続)(「ところで、～)を表すのに用いられる。

「ところ」がこれほど多くの表現に現れるのは、この<部分>と< (連続体としての) 全体>という構造が、我々の言語外現実を把握する基本的なパターンだからであると考えられる。